

コロナ禍における遠隔会議システムツールを用いた
保育実践の可能性と課題
— 3歳児クラスの絵本の読み聞かせと栽培活動に着目して —

田島 美帆¹・渡邊 真帆²・濱名 潔^{1,3}
境 愛一郎⁴・中坪 史典²

Possibilities and Challenges Identified in Early Childhood Education and Care Using
Teleconferencing System Tools During the COVID-19 Pandemic:
— Picture Book Reading and Cultivation Activities for Classes of Three-year-olds

Miho TAJIMA¹, Maho WATANABE², Kiyoshi HAMANA^{1,3}
Aiichiro SAKAI⁴, Fuminori NAKATSUBO²

Abstract: This study examined the possibilities of and issues in using teleconferencing system tools in early childhood education and care (ECEC)—for this, it focused on children’s words and actions and clarified how they participate in ECEC based on video recordings of such participation through these tools; these video recordings were analyzed using a time sample method.

The analysis revealed that even three-year-olds who had not yet started preschool could concentrate for a certain period of time during picture book reading if they were in a relaxed state. However, it became apparent that the children were concentrating too hard and getting too close to the camera, which made it difficult for the ECEC teacher to discern their responses. In addition, during the vegetable cultivation activity, it was found that the children’s participation level increased when the caregiver conducted quiz-style activities while interacting with a person nearby. On the other hand, it was also found, the presence of that person affected concentration, which can impact participation.

From the above, it can be said that the possibilities and challenges in ECEC using teleconferencing system tools are inextricably linked. The reason for this is that each family’s situation easily impacts the use of such tools. In particular, for three-year-olds who have not yet started kindergarten, receiving ECEC at home can easily turn a single event into both a possibility and a challenge because the boundary between the two is blurred.

Key words: Teleconferencing System Tools, Time Sampling, Picture Book Reading, Cultivation Activities, Classes of Three-year-olds

1. 問題と目的

1) 問題の背景

2020年2月末、新型コロナウイルス（以下、COVID-19）の感染拡大を抑制することを目的に、政府は全国の小中高、および特別支援学校に対して、一斉休校を要請した。この前代未聞の措置は、その後、5月末まで続くこととなり、

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
2 広島大学大学院人間社会科学研究科
3 認定こども園 武庫愛の園幼稚園
4 共立女子大学家政学部児童学科

学校は、短期間のうちに、子どもたちの授業のオンライン化を急速に進めることとなった（文部科学省初等中等教育局情報教育・外国語教育課，2020）。この措置による影響は、幼児教育施設にもおよび、とりわけ幼稚園は、4月から5月にかけて、約4分の3もの園が臨時休業し（文部科学省，2020）、入園式の延期あるいは中止を余儀なくされた。

文部科学省「幼児教育の実践の質向上に関する検討会」は、この非常事態における幼稚園の取組みについて、「自宅で過ごす幼児及び保護者との連携を密にし、幼児本人とも直接電話等で対話すること等により、幼児の健康状態の把握や心のケア等、家庭における幼児の心身の健全な発達に向けた必要な支援を行うこと」（文部科学省，2020）が必要であると述べており、「新型コロナウイルス感染症への対応のための幼稚園等の取組事例集」（文部科学省初等中等教育局幼児教育課，2020）をまとめている。事例集では、幼稚園、認定こども園が臨時休業等を行なった場合に実施した幼児・保護者に対する支援の取組事例が紹介されており、教育活動を継続・再開している園においても活用を促している。例えば、その内容は、家庭で遊ぶための素材の郵送、保育動画の配信、園ホームページでの情報発信、絵本の貸し出し、遠隔会議システムツールを用いた保育実践などである。この事例集は、2020年5月13日時点にはすでにまとめられており、短期間のうちに作成されていることから、当時の状況が幼児教育においても、いかに非常事態であったかがうかがえるだろう。

また、国立教育政策研究所（2020）は、ウェブサイト内「新型コロナウイルス対策に関する情報提供」ページにおいて、行政が発信している情報や園におけるCOVID-19への対応策等をはじめ、大学関係機関、学会、大学附属幼稚園などが発表している「家庭での遊び方、過ごし方」などをまとめて紹介し、更新を続けている。おもな内容は、身体を動かす遊びや体操、家の中にある身近なものを使った工作等の紹介で、PDFデータとして提供されているものから、動画配信の形式をとるものまで様々である。しかし、これらは、あくまでも、コンテンツの紹介であり、それがすなわち保育実践を補完しているとは言い難いだろう。

対して、遠隔会議システムツールを用いた保育実践は、リアルタイムで顔を見ながら話すことができるため、保育者と子ども、保育者と保

護者、さらには、子ども同士のつながりを保持し、双方向のコミュニケーションが可能となる。2020年8月の、NHK ニュースでは企業がサービスとして提供している事例や自治体の導入事例などが取り上げられ、コロナ禍における新たな保育の形として紹介されている。

先にも触れた事例集（文部科学省初等中等教育局幼児教育課，2020）によると、遠隔会議システムツールを用いた保育実践は、「お話」、「お遊戯」、簡単な制作など、実際の保育活動を定期的に決まった時間に実施することで、生活リズムを整え、園再開後への生活に期待を持てるようになること、さらに、家庭でも遊びを楽しむ、満足感、充足感を味わえるようになることへの支援として位置づけられている。つまり、臨時休業によって登園がままならない状況下であっても、可能な範囲で、普段行っている保育実践を提供することで、保育の営みを途切れさせまいとする取組みであるといえる。

これらのことから、遠隔会議システムツールを用いた保育実践が、保育の新たな可能性を有しているといえるだろう。しかし、まだ始まったばかりのこの実践については、事例集（文部科学省初等中等教育局幼児教育課，2020）やWEBサイト（ベネッセ教育総合研究所，2020）において、双方向性を意識した遊戯や製作などに取組んだ事例や、実施した側である保育者らの工夫や感想が紹介されているのにとどまっており、保育を受ける子どもの姿に焦点を当てた知見はほとんど見当たらない。しかし、先に述べたとおり、遠隔会議システムツールを用いるものであっても、そこで提供されているのは、通常の保育実践の補完を目指すものであるため、子どもの言動を分析した知見が必要であると考えられる。

2) 研究の目的

以上をふまえ、本研究は、遠隔会議システムツールを用いた保育実践における子どもたちの言動に着目し、彼らが、どのように参加しているのかを明らかにすることによって、保育実践としての可能性と課題を検討することを目的とする。

コロナ禍において、突然始まった臨時休業により、園によっては、これまでの保育の文脈ではなじみのない新しい形態の保育に着手することとなった。想定外のできごとから生み出された、この保育実践の可能性を探ることは、今後の保育の新たな選択肢をふやすことにつながると考える。

2. 研究対象

1) 研究対象

本研究の対象はF県内のX認定こども園(以下、X園)において行われた遠隔会議システムツールを用いた保育実践に各家庭から参加する3歳児クラスの子どもの様子が映し出されている映像である。

X園では、政府が出した全国一斉休校の措置により入園式が延期されたが、医療従事者、宅配業者、スーパーの従業員、介護や保育等の社会福祉職に従事する保護者が全体の10%を占め、それらの家庭の子どもは登園し、残りの90%の家庭の子どもは、自宅で過ごすこととなった。しかし、X園では、自宅にいる子どもに何もアプローチをしなければ、その子どもたちの育ちがとまってしまうと危惧したため、まずは、全園児に向けて、動画配信を行った。当初は、動画配信のみであったが、その後、遠隔会議システムツールの一つであるZoomを用いた保育を実施するようになった。実施に至った理由は、次の3つである。

第一に、緊急事態宣言解除後に保育をしていくにあたり、保育者も子どもたちの様子を知っておく必要があるとの考えがあった。

第二に、Zoomの機能特性によって、オンライン上でリアルタイムに担任保育者と相互に関わることができるため、子どもが担任保育者に対してより親しみを持てるのではないかと考えがあった。

第三に、園への登園がないことで子どもの生活リズムが乱れている可能性も考えられたため、毎週決まった時間に配信することで生活リズムが整うことに、期待が込められていた。

Zoomを用いた保育は、クラスごとに、5月の1週目から6月の1週目にかけて週1回のペースで計4回実施された。1回あたりの時間は平均して約20分間で、クラスによって異なるが、概ね、9:00~14:00の時間帯に実施された。参加は強制ではなく任意としたため、各家庭がZoomのオンラインミーティングを開いた時点で参加したとみなされた。各クラスの平均参加家庭数は8であった。

なお、登園していた子どもたちも、家庭から参加する子どもたちと同様の保育を受けるため、遠隔会議システムツールの接続が可能な部屋から参加していた。

内容は各クラスや日によって異なるが、概ね

共通していた。まずは、子どもたちと「おはようございます」または「こんにちは」などの、はじめの挨拶を一緒に行ったのち、保育者が、一人ずつ子どもの名前を呼んで、出欠確認を行う。次に、絵本の読み聞かせ、野菜の栽培活動の紹介、音楽に合わせて踊るなど、通常の保育内容をアレンジした活動を実施する。最後に、登園再開に向けて、家庭で取り組んでほしいことを伝え、子どもたちと「さようなら」の挨拶をして終了する、というような流れであった。

なお、原則として、挨拶の時以外は、接続を維持したまま、相手に音が聞こえないようにするミュート設定で参加することが求められていた。

2) 研究対象の選定理由

本研究で、3歳児クラスのZoomを用いた保育の映像を対象とする理由は、二つある。

第一に、Zoomを用いた保育に参加する子どもの言動に着目するのにあたり、まだ園生活が始まっていないX園の3歳児は、園生活におけるふるまいが身に付く前であり、他学年よりも、より自由な参加態度を抽出できるのではないかと考えたからである。

第二に、Zoomを用いた保育によって、初めて保育者や同じクラスの子と出会い、保育実践に触れるという彼らの経験は特異であり、園生活による影響が少ない分、より純粋な言動を見られるのではないかと考えたからである。

3) 倫理的配慮

研究協力園であるX園の園長には、研究目的を説明し、研究目的のみ映像を使用すること、個人が特定されないように配慮することを伝え、研究の許可を得た。

3. 研究方法

1) データの収集と分析対象の選定理由

X園で行われた3歳児のZoomを用いた保育のうち、本研究では、5月22日と5月29日の絵本の読み聞かせと野菜の栽培活動に参加する子どもの映像を分析対象データとした。データの概要は、表1の通りである。映像には、保育者と保育に参加する複数の子どもの様子が、一画面に映っている。なお、園から参加していた子どもたちは、参加時の様子を相手に見せないビデオオフの状態に参加していたため、分析対象には含まれていない。

本研究で、絵本の読み聞かせと野菜の栽培活動を分析対象に選定した理由は、次の3つである。

第一に、得られたデータのうち、全クラスにおいて安定して観察された場面であったからである。

第二に、遠隔会議システムツールを用いた保育実践においては、双方向のコミュニケーションが可能であるが、保育者の問いかけに対する子どもの反応が、他の活動に比べて抽出されやすいと判断したからである。

第三に、執筆者らは、遠隔会議システムツールを用いた保育実践の映像分析に着手するのが初めてであり、先行研究も十分にないことから、研究目的に照らし合わせて、分析しやすい場面を検討したところ、絵本の読み聞かせと野菜の栽培活動が妥当であると判断したからである。

表1 分析データリスト

	実施日	クラス名 (仮称)	子どもの 参加人数	観察時間
絵 本	2020年5月22日	ぞう	7	4分22秒
	2020年5月22日	きりん	7	2分11秒
	2020年5月22日	うさぎ	8	4分0秒
	2020年5月22日	くま	12	3分14秒
	2020年5月29日	くま	10	2分48秒
	2020年5月29日	りす	8	3分16秒
	2020年5月29日	パンダ	6	2分37秒
	2020年5月29日	ぞう	6	4分11秒
裁 培 活 動	2020年5月29日	くま	10	4分1秒
	2020年5月29日	りす	7	3分44秒
	2020年5月29日	うさぎ	9	5分22秒
	2020年5月29日	パンダ	6	4分2秒
	2020年5月29日	ひつじ	9	4分6秒
	2020年5月29日	きりん	6	4分44秒
	2020年5月29日	ペンギン	8	5分7秒
	2020年5月29日	たぬき	5	4分35秒

2) データの分析

得られたデータは、時間見本法を用いて分析を行なった。時間見本法とは、「行動を任意の時間間隔で区切り、そのおのおのにおいて観察対象となる行動の生起を記録する方法」である(中澤・大野木・南, 1997, p13)。本研究では、複数の子どもの様子を捉えた映像が分析対象で

あるため、行動生起の有無や生起頻度、持続時間等をチェックでき、同時に複数の行動を観察することが可能となる時間見本法を用いることで、オンライン保育において、子どもがどのように参加しているのかを明らかにするのに有効であると考えた。時間見本法の手法には、自由記述法、1/0サンプリング法、ポイントサンプリング法などがあるが、本研究は、複数名の行動および、複数の種類の行動を同時に捉えるため、このうち、各時間単位の切れ目のポイントを観察するポイントサンプリング法を用いた。

3) 分析の手順

手順1：子どもの注目すべき行動の抽出

執筆者全員で、X園のZoomを用いた保育の映像を視聴したところ、参加している子どもたちに、通常の対面による保育でも見られる言動がある一方で、遠隔会議システムツールを用いた保育ならではの言動があることに気づいた。そこで、それらの言動を抽出するために、「子どもの言動」「子どもの姿勢」「一緒にいる人」に大別し、子どもたちがどのように参加しているのかを明らかにできるようなカテゴリーを設定した。(表2参照)。

手順2：ポイントサンプリング法によるチェックリストの作成

時間見本法の手法であるポイントサンプリング法を用いて、10秒ごとの子どもの言動を、カテゴリーにしたがってチェックしながら、映像を視聴した。視聴する際には、執筆者同士でペアを組み、一人が分析をしたのち、もう一人が分析をし、分析者間で不一致があった場合には両者が納得するまで検討し、一つのカテゴリーに分類した。最終的に、チェックリストを、クラスごとに作成した(表3参照)。

手順3：活動ごとに生起した子どもの言動の特徴の抽出と生起理由の検討

クラスごとのチェックリストを、絵本の読み聞かせと、野菜の栽培活動ごとにまとめ(表4参照)、活動ごとの子どもの言動の特徴を抽出し、その言動がなぜ生起したのかを、チェックリストの結果をふまえながら、検討した。

表2 分析カテゴリー

	番号	内 容	定義・(詳細)
a 子どもの 言動	a-1	じっと画面を見ている	動かず、画面に話しかけず、何も持たず、誰ともやりとりせず、飲食もせず、画面をじっと見ている
	a-2	画面に向かって動いてみせる	保育者の声かけ、あるいは画面にうつっているものに反応して動く(指差し、片手、あるいは両手をあげる、手をふる、立ち上がって動いてみせるなど)
	a-3	画面に向かって話しかける	保育者の声かけ、あるいは画面にうつっているものに反応し、画面に向かって声が出ている出していないにかかわらず、話しかけている
	a-4	ものを持っている	保育者とは異なる絵本、玩具、ハンカチ、タオル、クッション、ぬいぐるみなどを持っている
	a-5	保育者と同じものを持っている	保育者と同じタイトルの絵本、同じ教材、人形などを持っている
	a-6	一緒にいる誰かとやりとりをしている	画面にうつっている、うつっていないに関わらず、なおかつ、一緒にいる人と声が出ている出していないにかかわらず、やりとり(話している、聞いている、見つめ合っている等の相互作用)をしている
	a-7	飲食をしている	ものを食べたり、飲んだりしている
	a-8	判別不能	a-1～a-7のいずれにも該当しない、あるいは、顔の一部のみ、体の一部のみ、胴体のみなどが映っている(近影・遠影)ため、a-1～a-7の判別できない
b 子どもの 姿勢	b-1	座っている	椅子、ソファ、床、大人の膝の上などに座っている
	b-2	寝転がっている	椅子、ソファ、床、大人の膝の上などに寝転がっている
	b-3	立っている	椅子、ソファ、床の上に立っている
	b-4	移動する	見ていた場所から、自ら動いて移動し、画面を見ていない
	b-5	判別不能	b-1～b-4のいずれにも判別できない
C 一緒に いる人	c-1	本人とは異なる子どもがいる	きょうだいと思われる子どもがいる
	c-2	大人がいる	保護者と思われる大人がいる
	c-3	本人とは異なる子どもと、大人がいる	きょうだいと思われる子どもと、保護者と思われる大人がいる
	c-4	本人の他には誰もいない	本人の他には誰もおらず、一人で参加している

表3 チェックリスト：5月22日 りょう組 読み聞かせ(一部抜粋)

項目番号	録画時間	保育者画面の様子	A(女兒)			B(女兒)			C(男児)			D(女兒)		
			a 子どもの 言動	b 子どもの 姿勢	C 一緒に いる人	a 子どもの 言動	b 子どもの 姿勢	C 一緒に いる人	a 子どもの 言動	b 子どもの 姿勢	C 一緒に いる人	a 子どもの 言動	b 子どもの 姿勢	C 一緒に いる人
1	0:05:14	じゃあね、今日は最後に一つ(絵本「おめんです」の表紙を見せる)絵本を見て、終わりにしたいと思います。	a-1	b-1	c-3	a-1	b-1	c-4				a-1	b-1	c-4
2	0:05:24	?にはね、いろんな動物のお友達がね、隠れています。なんの動物が出てくるか、みんな当ててみてねー	a-6	b-1	c-1	a-1	b-1	c-4				a-1	b-1	c-2
3	0:05:34	『おめんです』さあ、最初に出てくるお友達は誰かなあ?ページをめくる。こわーい鬼のお面、	a-1	b-1	c-3	a-1	b-1	c-4	a-1	b-1	c-4	a-1	b-1	c-4
4	0:05:44	かぶっているのはだあれ?(だあれで、ぐいっと絵本をカメラに近づける)みんな誰だかわかる?じゃ、ちょっと見てみるよ。いくよ。ちら!(ページをめくって、後ろのページを見せる)	a-1	b-1	c-3	a-1	b-1	c-4	a-1	b-1	c-4	a-1	b-1	c-4
5	0:05:54	(間) ちら!(ページをめくる) あれ、誰が隠れてた?わかる?もーもーもーってね、鳴く	a-1	b-1	c-3	a-1	b-1	c-4	a-1	b-1	c-4	a-1	b-1	c-4
6	0:06:04	動物さん(ページをめくる)だよ。だあれだ?(2秒、間) あ!すごい。さあ、じゃあ、ちょっと見てみるよ。こたえは	a-1	b-1	c-3	a-1	b-1	c-4	a-1	b-1	c-4	a-1	b-1	c-4

表4 絵本読み聞かせと栽培活動のカテゴリー数集計

絵本読み聞かせ

	うさぎ 5月22日	きりん 5月22日	うさぎ 5月22日	くま 5月22日	うさぎ 5月29日	パンダ 5月29日	りす 5月29日	くま 5月29日	合計
a-1	119	47	178	153	125	71	124	93	910
a-2	4	4	4	4	0	4	0	6	26
a-3	23	2	1	0	0	0	1	0	27
a-4	5	5	24	24	0	0	3	25	86
a-5	0	12	0	0	0	0	0	0	12
a-6	6	8	4	5	8	3	13	5	52
a-7	0	0	0	0	0	0	0	0	0
a-8	20	13	13	13	18	17	19	25	138
b-1	150	83	213	171	150	78	156	146	1147
b-2	0	0	3	16	0	0	11	1	31
b-3	2	1	1	6	0	1	0	2	13
b-4	0	2	0	0	0	0	11	0	13
b-5	25	5	7	6	0	16	2	5	66
c-1	25	20	77	16		11	0	15	164
c-2	28	18	16	43	16	1	15	9	146
c-3	25	4	6	0	0	0	20	0	55
c-4	101	45	124	136	108	84	105	132	835

栽培活動

	うさぎ 5月29日	きりん 5月29日	たぬき 5月29日	ひつじ 5月29日	パンダ 5月29日	ペンギン 5月29日	りす 5月29日	くま 5月29日	合計
a-1	201	97	76	111	87	197	102	157	1028
a-2	21	14	14	17	8	9	8	21	112
a-3	3	5	7	5	11	3	4	2	40
a-4	13	0	3	3	0	1	1	28	49
a-5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
a-6	14	25	10	20	12	15	17	2	115
a-7	5	0	0	4	0	2	0	0	11
a-8	20	29	29	21	22	17	26	21	185
b-1	276	164	114	176	83	234	157	217	1421
b-2		0		2	7				9
b-3		0		2	0	7		1	10
b-4		0			5	2	2		9
b-5	1	0	4	1	50			13	69
c-1	66	68	12	23	0			10	179
c-2	21	4	7	28	16	71		1	148
c-3	15	9	1	8		29	25	0	87
c-4	185	95	118	121	131	143	134	220	1147

4. 結果と考察

Zoomを用いた保育に参加している子どもの言動に着目したところ、以下のように参加していることが明らかになった。チェックリストの一部を示しながら、述べていく。

1) 絵本の読み聞かせにおける子どもの言動

(1) リラックスした状態で、読み聞かせに集中して参加する

表5 絵本読み聞かせ うさぎ組 A 児 (一部抜粋)

項目番号	録画時間	保育者画面の様子	A (男児)		
			a 子どもの言動	b 子どもの姿勢	c 一緒にいる人
1	0:10:56	じゃあ、今日は最後に、じゃじゃん！(絵本を見せながら)	a-1	b-1	c-4
2	0:11:06	トマト味の美味しいものなーんだ？何かな、ちょっと考えながら見ててね。	a-1	b-1	c-4
3	0:11:16	(間) けちゃっぶれっしゃ (表紙をめくる) (カメラに近づく)	a-1	b-1	c-4
4	0:11:26	(ページをめくる) けちゃっぶれっしゃ。けちゃっぶれっしゃ。しゅっぱ一つ。ぶー。け	a-1	b-5	c-4
5	0:11:36	ちゃ、けちゃ、けちゃ、けちゃ。けちゃ、けちゃ、けちゃ。(ページをめくる) けちゃ、けちゃ、けちゃ、けちゃ。	a-1	b-1	c-4
6	0:11:46	ミミズのきょうだい、こんには。こんには、ケチャップれっしゃ、待ってたよ、今日も赤がまぶしいね。このホットドックに、	a-1	b-1	c-4
7	0:11:56	ドッグにケチャップをおくれ。(ページをめくる) おやすいごよう。ぶちゅぶちゅ	a-1	b-1	c-4
8	0:12:06	ぶちゅー！わお！まるでミミズの親分だ。いっただっきまーす！(ページをめくる)	a-1	b-1	c-4
9	0:12:16	けちゃ、けちゃ、けちゃ、けちゃ。けちゃ、けちゃ、けちゃ、けちゃ。お次はパンダの兄弟だ。ごきげんよう。	a-1	b-1	c-4
10	0:12:26	ごきげんよう。ケチャップれっしゃ、待ってたよ。今日はお天気最高だね。このオムレツにケチャップをおくれ。	a-1	b-1	c-4

読み聞かせでは、主に、対象が2歳児からの絵本が用いられていた。それらは、次のページの展開を聴き手に予想させるしかけ絵本をはじめ、乗り物、食べ物、動物など、子どもが親しみをもちやすいものが登場する内容で、2分から4分程度の長さであった。表5は、4分程の絵本の読み聞かせに参加しているときの、うさぎ組 A 児の抜粋である。このように、終始、a-1 (じっと画面を見ている) が、チェックされていることから、読み聞かせの間中、画面を注視していることがわかる。絵本の読み聞かせの間、終始、a-1がチェックされた子どもは、栽培活動がのべ60人中0人だったのに対して、絵本の読み聞かせは、のべ64人中7人であった。また、活動全体で見ても、絵本の読み聞かせにおいて、a-1がチェックされている割合が、73% (表7参照) であることから、園生活がまだ始まっていない3歳児でも、遠隔会議システムツール上での絵本の読み聞かせに集中して参加できるということがいえる。

また、絵本の読み聞かせの際の姿勢に注目してみると、のべ64人中29人は、終始、座っている姿勢を保持していることがわかった。座り方は様々で、子ども用の椅子に座るのをはじめ、保護者が使用していると思われる大人用の椅子に座る、大きなソファの背にもたれかかりながら座る、床に座る、保護者の膝の上に座るなどの姿が見られた。本来、対面保育においては、床の上、あるいは椅子に座って聞くことが多いと思われるが、家庭の中で、自分の好きな姿勢を保持し、リラックスした状態でいられることが、絵本を集中して聞く一要因であるとも考えられる。

(2) 集中するあまり、カメラに接近して参加する

表6 絵本読み聞かせ パンダ組F児（一部抜粋）

項目番号	録画時間	保育者画面の様子	F (女児)		
			a 子どもの 言動	b 子どもの 姿勢	C 一緒に いる人
1	005:44	では、今日のお話。「おやおやおやさい」（表紙をめくる）	a-8	b-5	c-4
2	005:54	(問) おやおやおやさい。今日はいよいよマラソン大会（ページをめくる）	a-8	b-5	c-4
3	006:04	(問) そらまめ、そろってマラソンさ。	a-8	b-5	c-4
4	006:14	(ページをめくる) (問) 人気者のにんにく、筋肉むきむき	a-8	b-5	c-4
5	006:24	(ページをめくる) りっばなバセリはつっぱしる。	a-8	b-5	c-4
6	006:34	(ページをめくる) ラディッシュ、だんだんダッシュする「あ、いろいろな野菜があるねえ」	a-8	b-5	c-4
7	006:44	「見える？」そろり、そろり、セロリははしる。	a-8	b-5	c-4
8	006:54	(セロリを指さす) (ページをめくる) きゅうりは、急に止まれない。	a-8	b-5	c-4
9	007:04	(きゅうりを指さす) 「きー。にんじんさんが危ないってなってるねえ？」(ページをめくる) かぼちゃのぼっちゃん	a-1	b-5	c-4
10	007:14	川にぼっちゃん。「落ちちゃった」(ページをめくる)	a-1	b-5	c-4

一方、表6のようなチェックも見られた。このように、a-8（判別不能）が続く場合は、主に、カメラに接近して、顔や身体の一部のみ、あるいは胴体のみしか画面に映っておらず、姿勢もb-5（判別不能）にチェックがつく。前後の子どもの様子から、画面にうつっている絵本をよく見ようとしてカメラに接近していること考えられるが、それによって、子どもが何を見ているのか、どのような表情をしているのかが、保育者からは見えなくなってしまう。顔や身体の一部であっても、動かずに姿勢が保持されている場合は、じっとカメラの画面を見ていることも予測されるが、あくまでも推測の域を出ない。

奥山・松述・香曾我部（2014）は、絵本の読み聞かせの際、保育者が、一人一人の子どもの言動や表情の変化に敏感に反応しながら注視し

ていることを明らかにしている。また、山下（2017）は、「読み聞かせは<読み手>から<聴き手>への一方的なコミュニケーションではなく、ノンバーバルなやりとりを含んだ双方向的なコミュニケーションである」と述べている。これらのように、保育室における絵本の読み聞かせは、同じ空間にいて、保育者が、子どもの反応をうかがいながら行うことが重要であるとされているが、遠隔会議システムを用いた保育においては、それが困難となる。たとえば、子どもの側は、集中して見ているつもりでも、それが画面から読み取れない場合、保育者は、反応を汲み取りづらくなってしまふのである。

2) 野菜の栽培活動における子どもの言動

(1) 保育者の問いかけに対して、近くにいる人とやりとりをしながら答える

表7は、絵本読み聞かせと野菜の栽培活動における、aの項目（子どもの言動）にチェックがついた数を示したものである。若干ではあるが、栽培活動のほうがa-2（保育者の声かけ、あるいは画面にうつっているものに反応して動く）、および、a-3（保育者の声かけ、あるいは画面にうつっているものに反応し、画面に向かって声が出ている、出ていないにかかわらず、話しかけている）の割合が多い。これは、野菜の栽培活動において、保育者が子どもに対して、野菜クイズを出す内容であったことが要因だと思われる。この野菜クイズは、臨時休業中に、保育者が植えた野菜の成長過程にある実や葉っぱ、花の写真を見せて、なんの野菜かを、子どもに当てさせるものである。保育者は、ヒントとなる写真を見せたあと、「この葉っぱは、どんな野菜になるのかな？1番、にんじんだと思うおともだち、丸をつくって」などと言って、子どもに問いかけ、画面越しにジェスチャー、あるいは挙手で答えるよう、促していた。その問いかけに対して、子どもたちは、表8に見られるように、ジェスチャーや挙手で答えを示していた。

表7 絵本の読み聞かせと野菜の栽培活動におけるa項目（子どもの言動）の数

	a-1	a-2	a-3	a-4	a-5	a-6	a-7	a-8	計
絵本 a 項目	910	26	27	86	12	52	0	138	1251
割合 (%)	73%	2%	2%	7%	1%	4%	0%	11%	100%
栽培 a 項目	1028	112	40	49	0	115	11	185	1540
割合 (%)	67%	7%	3%	3%	0%	7%	1%	12%	100%

表8 栽培活動 たぬき組C児（一部抜粋）

項目番号	録画時間	保育者画面の様子	C（男児）		
			a 子どもの 言動	b 子どもの 姿勢	C 一緒に いる人
7	0:10:32	ちっちゃーい野菜です。じゃあ、ちよっと見てね。1番。きゅうりかな（きゅうりのイラストを見せる）	a-2	b-1	c-4
8	0:10:42	(間)きゅうり。2番。トマト(トマトのイラストを見せる)	a-1	b-1	c-4
9	0:10:52	(間)さあ。トマトときゅうり、どっちでしょうか？さあ、聞いてみるよ、ちよっと考えてみて。どっちにしようかな	a-1	b-1	c-4
10	0:11:02	どっちにしようかな。じゃあ、こっちって思うほうに、丸してください(頭の上で丸をつくって見せる)いい？	a-6	b-1	c-1
11	0:11:12	はい、きゅうりだと思ってお友達。	a-2	b-1	c-4
12	0:11:22	じゃあ、次いよ。トマトだと思ってお友達。まる一。	a-2	b-1	c-2
13	0:11:32	じゃあ、正解は。ジャカジャカジャカジャカ…。ジャジャン！正解はトマトでした！	a-2	b-1	c-4
14	0:11:42	実は今、幼稚園でトマトを育てています。まだまだ野菜はあるよ。見てて	a-3	b-1	c-4
15	0:11:52	ねー。第二問です、いくよ。こんな大きな葉っぱ。	a-3	b-1	c-4
16	0:12:02	(写真を見せながら)土から、こんなに大きな葉っぱが生えています。ちよっと見て見て！この葉っぱ。	a-3	b-1	c-4

本来、対面の保育における野菜の栽培活動は、子どもたち自らが種を蒔き、水やりをし、成長する過程を、五感で味わえるように設定されている。しかし、臨時休業が続く状況では、それがままならないため、保育者らは、子どもたちが確認することのできない成長過程の様子をクイズ形式で示し、野菜の栽培に興味を持てるような内容に変更していた。この結果、表8のように、子どもたちは、保育者が出すクイズに対して反応を示していた。

さらに、クイズの合間には、a-6（一緒にいる誰かとやりとりをしている）にチェックがつくこともあった。

これは、画面に写っている、写っていないに関わらず、子どもの近くにいる大人や子どもと共に考えたり、クイズに当たったときの喜びを共有したりする姿が反映されているものである。栽培活動で、a-2、およびa-3の割合が増えたことは、内容がクイズ形式で、子どもの参加を促しやすいものだったことにくわえ、一緒に参加する人が近くにあったことも、一つの要因ではないかと考えられる。

(2) 近くにいる人とのやりとりによって、逸脱する

表9 栽培活動 パンダ組A児（一部抜粋）

項目番号	録画時間	保育者画面の様子	A（男児）		
			a 子どもの 言動	b 子どもの 姿勢	C 一緒に いる人
13	0:12:58	できてないけど、これがお水をあげたり、おひさまの光を当てると、だんだんだんだん、あまーい、あまーい			c-2
14	0:13:08	トマトに変身していきます。			c-2
15	0:13:18	これがトマトの葉っぱさんになります。じゃあ、次。先生は	a-6	b-1	c-2
16	0:13:28	トマトだけじゃなくて、もう一つ、育ててるお野菜があります。それはジャン！こんなお野菜。	a-6	b-4	c-4
17	0:13:38	葉っぱが、ハートの形してるね。ハートの形をしたお野菜、じゃあ、それは、問題です。	a-1	b-2	c-4
18	0:13:48	最後の問題。どっちでしょう。さつまいもとにんじん。	a-6	b-2	c-4
19	0:13:58	さあ、どっちかな？さつまいもだと思ってる？にんじんかなあ？	a-6	b-2	c-4
20	0:14:08	ヒントは、紫色です。さあ、行くよ、どっちなかなー。さつまいもだと思ってる？	a-6	b-2	c-4
21	0:14:18	にんじんだと思う人？はーい。じゃあ、正解はー。じゃじゃーん。	a-1	b-2	c-4
22	0:14:28	さつまいもでしたー。今ね、○○先生ね、みんなが来たときに	a-6	b-2	c-4

その一方で、近くの人とのやりとりが、ときに、参加を妨げることもあった。例えば、表9のパンダ組A児は、クイズの途中で、隣に座っている保護者と思われる大人に抱きつく行動(a-6)をきっかけに、それまでに座っていた位置から移動する(b-4)、移動する途中に、畳の上に横たわって(b-2)、大人に身体を引っ張られて畳の上をすべることが楽しくなっているようであった。この間、画面上には、保護者らしき人が映ったり、(c-2)、映らなかつたり(c-4)したものの、やりとりをしていることは見てとれた。このほかにも、隣にうつっているきょうだいと思われる子どものほうが、カメラの前の位置を占領してしまい、喧嘩らしき行動がうつる場合もあった。これらのことから、近くに人がいるということが、子どもにとって、参加を促す要因になる一方で、気が逸れたり、集中力を欠いたりなどの、参加を妨げる要因にもなりうるということが明らかになった。

5. 総合考察

これまでの結果をふまえ、遠隔会議システムツールを用いた保育実践としての可能性と課題について検討する。

まず、絵本の読み聞かせにおける子どもの言動からは、画面越しでも、集中して聴く姿が見られることが明らかになった。このことから、入園前の3歳児でも、リラックスした状態であれば、一定の時間、集中して参加できる可能性があるということがいえるだろう。しかし、その一方で、集中するあまりに、カメラに近づきすぎる姿も見られ、このような状況になった場合、保育者側から、子どもの反応を読みとることが困難になる。そもそも、オンライン上では、ノンバーバルな情報が伝わりにくいことが指摘されている（中原・田中・村松・高橋，2021）。このことも踏まえて、遠隔会議システムツールを用いた保育を行う際には、予め、画面に向かって、正面を向いて座るよう保護者にアナウンスするなどの配慮が必ず必要となるだろう。

また、野菜の栽培活動における子どもの言動からは、保育者が提示するクイズ形式の内容に対して、近くにいる人とやりとりしながら参加する様子が明らかになった。このことから、近くに一緒に参加する人がいることによって、より参加度合いが高くなる可能性があるといえるだろう。しかし、その一方で、近くに人がいることで、内容とは関係のないやりとりが始まってしまうこともあった。このことから、保護者、またはきょうだいと思われる人たちのやりとりが、参加を妨げる要因にもなりかねない状態に陥ることも明らかになった。

以上のことから、遠隔会議システムを用いた保育実践においては、子どもの参加する姿勢によって、参加度合いが高まる一方で、状況によっては、その姿勢を把握しづらくなること、また、一緒に参加している人の存在が、参加の度合いを高める要因になる一方で、低くする要因にもなりえるなど、その可能性と課題が、表裏一体である面を有しているといえるだろう。その理由としては、遠隔会議システムツールを使用する際の状況が、各家庭によってまちまちであり、その状況によって、子どもの言動が影響をうけやすいことが挙げられる。本来、対面の保育では、環境による保育が重視されており、子どもの発達や、保育者の子どもに対する理解に基づいて環境を整え、保育を行うことが求められている。遠隔会議システムツールを用いた保育実践においては、保育者が環境に関知することがかなわず、各家庭の状況に依存せざるを得ないのが現実である。吉田・岩本（2020）は、子どもが「オンライン保育」に参加する際に、

パジャマを着ていても、飲食をしても問題ないということを伝えたと述べている。本研究においても、飲み物を飲みながら参加する（a-7）、保育とは関係のないものを手に持ったまま参加する（a-4）子どもの様子が、少数ではあるが確認された。特に、入園前の3歳児にとっては、家庭にしながら保育を受けることは、両者の境界が曖昧であるがゆえに、一つの事象が、参加度合いによくも悪くも影響するという意味において、可能性にも課題にも転じやすいと考える。

とはいえ、まだ一度も園に登園したことのない入園前の3歳児が、家庭にしながら、リラックスした状態で参加できていたことも事実である。また、X園の3歳児たちにとっては、Zoomを用いた保育に参加し、保育者や他の子どもの様子を見て、園で行われる保育実践を体験することによって、登園に対する不安がいくらかでも軽減された可能性もあるだろう。だとするならば、遠隔会議システムツールを用いた保育実践を、「ならし保育」と位置づけて、入園前の園児が体験できるような試みが、今後あっても良いのではないだろうか。本来、「ならし保育」と呼ばれるものは、保育時間を短くしたり、保護者と一緒に過ごしたりすることによって、入園したばかりの子どもが、園生活に徐々に慣れていくことを目的として行われるものである（砂上，2011）。入園することで生じる環境の大きな変化は、子どもに不安と負担を与える。しかし、子どもが慣れ親しんでいる家庭という場にながら、保育実践に触れられる機会は、保護者にとっても、子どもにとっても、安心感を抱いたまま、新しい体験を受け容れていくことにつながると考えられる。

コロナ禍における、遠隔会議システムツールを用いた保育実践は、幼児教育史上、前代未聞の非常事態が生み出した苦肉の策といえるだろう。しかし、そこから見えてきた可能性と課題は、コロナ禍以降の保育の、新しい可能性の一つに転換させていくことも可能であり、今後も引き続き機能するよう、考えていく必要がある。

6. 本研究の限界と課題

本研究は、時間見本法を用いることで、画面にうつる、複数の子どもの個々の姿を同時に読み取ることができた。しかし、分析中、画面越しに、子ども同士のやりとりの兆しが感じられる場面がいくつか見られたが、その確認は得られず、保育者の言動に対する個々の子どもの言

動を抽出するに留まった。このことは、Zoomを用いた保育が、原則として、相手に音が聞こえないようにするミュート設定での参加を推奨していたことにも起因する。また、分析対象となった映像は、X園が、遠隔会議システムツールを用いた保育実践に取り組み始めたばかりの段階のものであり、保育者も子どももまだ慣れていない状態であった。可能性と課題について、さらに分析するためには、初期段階以降の映像を分析することも必要である。さらに、遠隔会議システムツールを用いた保育実践が、臨時休業明けの、通常の保育にどのように接続していったのか、その関係性についても、今後、検討していく必要がある。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2020), これからの幼児教育, 2020年度秋号,
<https://berd.benesse.jp/magazine/en/booklet/?id=5543> (最終閲覧日: 2021年3月20日)
- 国立教育政策研究所 (2020), 新型コロナウイルス対策に関する情報提供
https://www.nier.go.jp/youji_kyouiku_kenkyuu_center/link.html#10 (最終閲覧日: 2021年3月14日)
- 文部科学省 (2020) 幼児教育の実践の質向上に関する検討会 (第9回) 参考資料<5>, 幼児教育の現状について, 新型コロナウイルス感染症拡大の状況における幼稚園等の具体的な取組, 102-104.
https://www.mext.go.jp/content/20200424-mxt_youji000006830_08.pdf (最終閲覧日: 2021年3月18日)
- 文部科学省初等中等教育局情報教育・外国語教育 (2020) 小中高等学校におけるICTを活用した学習の取組事例について,
https://www.mext.go.jp/content/20200527-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf (最終閲覧日: 2021年3月18日)
- 文部科学省初等中等教育局情報教育・幼児教育課 (2020) 新型コロナウイルス感染症への対応のための幼稚園等の取組事例週,
https://www.mext.go.jp/content/20200512-mxt_youji-000005336_002.pdf (最終閲覧日: 2021年3月18日)
- 中原淳 (編)・田中智輝・村松灯・高橋美佐 (2021) 学校が「とまった」日 ウィズ・コロナの学びを支える人々の挑戦, 東洋館出版社.
- 中澤潤・大野木裕明・南博文編 (1997) 心理学マニュアル観察法, 北大路書房, 13-23.
- 奥山優佳・松述毅・香曾我部琢 (2014) クラス活動の絵本の読み聞かせにおける相互作用の意義: 保育者と幼児の視線の変容プロセスの分析より, 東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要, 第4巻, 73-82.
- 砂上史子 (2011) ならし保育 保育学用語辞典 第6版, ミネルヴァ書房, 120-121.
- 山下俊幸 (2018) 「対話的読み聞かせ」の実践的研究—コミュニケーションの場としての「読み聞かせ」のデザイナー, 関東学院大学人間環境研究所所報, 第16号, 29-39.
- 吉田貴子・岩本茉莉 (2020) コロナ禍における保育が果たす役割—カリフォルニア州立私立幼稚園におけるオンライン保育を手がかりに—, 国際研究論叢 大阪国際大学紀要, 第34巻1号, 73-82.